

水俣における共生のまちづくりの可能性 —「ほっとはうす」の取り組みから—

The Possibility of community reform for
symbiosis in Minamata —Based on the activity
of “HOTTO HAUSU” —

小林 繁

KOBAYASHI Shigeru

(1) 研究テーマと方法

わが国の公害病の原点とされる水俣病は、公式発見(1956年5月1日)から50年以上が経過した。しかしながら、水俣病被害の歴史はまだ終わってはならず、今なお認定申請者は熊本県と鹿児島県だけで6000人を超えているといわれている。2004年10月に最高裁判所は、22年の長きにわたって争われてきた「チッソ水俣病関西訴訟」において、水俣病の拡大を認知していたにもかかわらず、工場排水規制などの権限を発動しなかった国と熊本県の責任を認め、あわせて水俣病の判断基準についても原告側主張を大幅に受け入れた。水俣病の問題は、これまでこうした患者の認定と保障のあり方に重点がおかれ、裁判でもその点が主に争われてき

たわけであるが、しかしながらその問題の本質は、排除と差別の歴史の中にあるといえる。

本研究では、このような水俣病問題における差別の構造を明らかにすることで、社会的排除の視点から今日における水俣病をめぐる問題と課題を整理するとともに、こうした差別によって分断された人間関係と地域を再生していく可能性をもつひとつの取り組みとして「ほっとはうす」の活動に着目する。

「ほっとはうす」は、胎児性および小児性の水俣病患者とそのほかの障害をもつ人がともに運営する喫茶コーナーであり、2000年からは水俣市の共同作業所として、そしてさらに2003年には小規模の授産施設として法人認可された。そこでは、店内での喫茶サービスだけでなく市内のイベント(コンサート、講演会など)への出前、また作業コーナーでの水俣の自然の豊かさをメッセージする野花の押し花作品やラベンダーのポプリ作りなどとあわせて、メンバーが水俣病の問題を語り伝える出前授業も市内の小・中学校を中心に行われており、そこからは水俣病の認識や障害のとりえ方が大きく変わってくる様子が、子どもたちの感想文を通して生き生きと伝わってくる。

しかしながら同時に、「ほっとはうす」では、今後メンバーの高齢化や障害の重度化が予想される中で、生活の質(QOL)をいかに維持し、高めていくかという課題が現実化してきているため、福祉のまちづくりやノーマライゼーションをキーワードにした福祉施策の充実に向けた取り組みの展開も求められてきているのである。

(2) 2007年度の研究実施の状況と今後の課題

以上のような課題意識にそって、昨年度は「ほっとはうす」を何度か訪れ、胎児性水俣病患者および障害をもつ人たちといっしょに作業をしながら彼らの様子を観察するとともに、適時聞き取り調査を行った。ここでは、日頃の「ほっとはうす」での仕事の感想やこれからの希望などとあわせて、水俣病の症状の進み具合などについても話をしてもらったが、特に長年の体への負担が首などの神経機能が集中しているところに表れてきているため、長時間集中する作業などができにくいことや加齢にともなって症状が今後どのように進むのかについての切実な不安が語られていた。

また2008年4月オープン予定の新しい施設づくりの取り組みの一環として行われたワークショップにも参加し、作業所および自立支援に向けた相談と一時宿泊の機能を兼ね備えた施設の具体的なイメージをメンバー全員で共有しながら設計作業を行っている様子を見る

ことができた。市の体育館の床に実寸大の間取りを形取ったテープを貼り、それぞれの部屋のスペースや入り口の広さと角度などをメンバーとスタッフで一つ一つ確認しながら必要な修正を設計事務所のの人たちと共同で行ったが、その際に、スタッフから今後の施設建設に向けてクリアすべき課題や財政的な問題について話を聞いた。あわせて法人の理事長にも聞き取りを行い、特にそこでは新しい施設が水俣での新たな地域づくりにつながっていくことの期待が強調されていた。

さらに2つの学校で行われた水俣病を伝えるプログラムの見学を行った。このプログラムは、主に「ほっとうす」のメンバーとスタッフが学校に出向き自らの水俣病体験を語ることによって、児童・生徒たちに水俣病とは何か、現在どのような問題を抱えているのかを伝える目的で行われている取り組みであり、これまで7年ほど市内および近隣の小・中学校と高校で継続して実施されてきている。今回は、芦北市の佐敷中学校と水俣市の第一小学校での子ども達の反応や交流の様子を観察した。前者の学校でのプログラムは初めてであり、中学2年生の総合的学習の時間の枠組みで実施された。ほっとうすのメンバーの生育史と水俣病による差別体験などの具体的な話を生徒達が熱心に聞いていたのが印象的であった。同時に、多くの質問が生徒から出たのは少々驚きであったが、事前の学習がかなりされているとのことであった。

また後者の学校でのプログラムは、これまでの取り組みの蓄積があるためリラックスした雰囲気の中で行われ、参加した小学2年生の児童は話の後の交流を目的としたゲームでもかなり積極的に参加するだけでなく、事前にメンバーの身体的ハンディキャップに対応した道具を工夫するなど、障害理解に関わる教育の取り組みとしても興味深いものであった。

以上のような一連の学校でのプログラムは、水俣病の理解だけではなく、障害の理解という点からも重要な取り組みであり、これから詳細に分析する予定である。それとともに、今後も継続して調査・見学をすることによって、共生のまちづくりという視点からこのプログラムの意義と課題について考察するようにしたい。